



新築記念號原稿募集

來る十月下旬母校新築落成に際しては本誌亦冊子を増大し斯道大家の論說を始め會員各位の研究調査其他を滿載し記念號として一大光彩を添へ度候間左記御含みの上奮て玉稿御寄送被下度願上候

- 一、種類 論說、詩歌、回箴、理想其他
- 一、締切期日 九月十日
- 一、原稿紙 可成十九字詰、二十行のもの文字は明瞭なること

六月 岐蘇林友編輯部

會員各位

研究

能登の檔林(續)

會員寺尾敬二

第四造 林

一、造林上の特徴  
檔は頗る強き陰樹にして他の枝下によく生育し枝條割合に多く立木度少き森林に於ては幹の下部より枝を生し下枝枯落せず材強靱にして風雪の爲に挫折せず然れ共強き風及大雪のため長幹甚しく屈撓せらるゝ時は年輪に沿ふて内部に裂目を生ト板に挽て豫想外の損失を招くことあり又マアテの甚しく拗捩せしものは幹の周囲の凹陷せる舊立溝に沿ふて裂目を生ずる事あり強き鱗甲より成る葉は霜及寒氣に對して避易せず根淺きも巨大にして蝸の脚のごとき大根は地表より四邊に延るを以て風倒を見ずスギ、ヒ

大正二年六月廿三日印刷  
大正二年六月廿五日發行

〔定價三錢〕

長野縣西筑摩郡福嶋町四〇四番地  
編纂兼發行人 安井正夫  
上水内郡岸田村字中御所八十番地  
印刷者 田中彌助  
長野市西后町乙廿一番地  
印刷所 長野新聞社活版部  
長野縣西筑摩郡福嶋町二八九番地  
發行所 蘆澤書店

岐蘇林友

第四十四號目次

研究 能登の檔林  
雜報 學校記事、校友會記事  
庭球大會、雜誌代、寄贈金、寄附金領收報告  
附錄 第三學年、第二學年修學旅行日誌

ノキの如く兔のために梢頭を噛み切らるゝことあり昆虫のために少しの害をも受けずクサアテは比重甚だ小にして運搬不便の地にも能く造林し得べし乾燥地及粘土地に耐る砂土に於ても可なりの生長をなす滯水のために枯死し鑽烟に對してはスギよりも強し挿木又取り木をなして能く活着し生長迅速には有らねども老年に至るも衰へず

二、苗木育成及植栽

イ、挿木

直接林地に挿條する法にして能州人が從來實行し來りし唯一の造林法なり一本の良母樹あれば年々其枝條を切り取りて山地に挿條し其の挿條少しく生長すれば又其枝條を切り取り斯くの如くして一本の檔は數年の間大數に分裂するなり此の無性の繁殖法は其の作業簡便なると時期を撰はざるによりて大に發達し遂に能州人の腦裡にはアテは結實せざるものなりと『少くも採種せら

る、程の多量は「の判断を生ずるに至れり  
今能州に於ける挿木の手續を左に記載す  
挿木の季節 能州人は機會あれば常に之を  
行ふ其季節を問はず道すがら其穂を見れば  
之を切りて自家の山地に挿込む其数の多少  
距離の正否及季節の如何を問はず然れども  
主に行はるゝは冬季の始め及春四五頃と  
す冬の始めには農閑にして主に伐木を行ふ  
故に自然山林に入るの機會多く且つ伐採木  
の枝條を容易に求め得らるゝを以て十一月  
及十二月始め方盛んに行はるる春に於ては彼  
岸前融雪後直ちに始めイチゴの花の白く咲  
く頃アテの新芽が二三挿伸び出てたる時を  
最盛時季とし入梅の終るまで之を休止せし  
一年の間全く實行せざるは只七八兩月のみ  
挿穂 主に五六年の枝を用ゆ是れ最も得易  
ければなり穂として良好なるは周圍に小枝  
を有し扁平ならざる古き枝なり若し扁平な  
る普通の枝端を用いる時は梢頭の抽出する  
こと困難なるも周圍に小枝を有するものは  
梢頭直ちに伸長し始むればなり若くして生  
長良好なる枝は穂に適せず是れ徒らに葉の  
み多くして切口小さく甘皮薄くして挿穂後  
枯損多ければなり永年の間困難して生活し  
たる葉少なき枝は割合に好く活き着き生長  
亦宜し緑色の鱗片を附着する部分を土中に  
挿込めは腐敗して活き着かざる故に穂の下  
端は鱗片必ず褐色に變せるか或は全く鱗片  
なきを要す然して通例の枝は四五寸にして  
鱗片褐色に變ず穂の長は一尺五寸内にと

す二尺に達すれば長きに失す  
穂は必ずしも切取即時挿穂するを要せず殊  
に秋季に於ては數日間放置するも妨げなし  
挿木法 穂の切口を鋭き鎌又は鋸の類にて  
斜に削り太き枝は尚ほ其の反對の側より少  
しく削りて兩邊等しからざる楔形となし左  
右より又少し削り入れ皮の剥けざる様靜  
かに之を地中に挿込す「少しく斜に」注意  
深き人は最初の大なる断面を穂の腹の方に  
「葉裏の方」入れ切口の心が地心に向ふ如く  
挿入するなり然れども實驗に依れば稍々大  
なる枝にても断面は最初の一面のみにて足  
れるが如し断面を多くする時は挿穂後包生  
層が其断面を包裹するに多くの日数を要し  
然らざれば其局部腐敗すべければなり  
春彼岸後より秋に至る間は皮剥け易を以て  
豫め小さき棒を以て孔を穿ち其孔に穂を入  
れ足にて上を踏み付け置くなり但し挿込の  
際長さ一寸位の剥皮ならば活き着く上に就  
ては余り障害とならず挿穂に就而最も注意  
すべきは葉の表裏を母樹に附着せる時の如  
く位置せしめ之を變化せざるにあり白き裏  
面を日光に直射せしむれば其穂は枯死すべ  
し地中に挿入する長さは五寸位にして其の  
部分の小枝は可成除去するを良とす斜に挿  
入すれば穂の位置よろしく且つ根の發生に  
都合よし良好なる穂は挿穂向滿一年にして  
多くの根を出し滿二年にして優等なるスギ  
の山出苗の根程となる然れども都合悪しき  
ものは一年間全く寸根を出さざるあり根の

出る以前葉は先づ伸長を始むるが故に寸根  
なきものも尚ほ多少生長をなすものあり  
根のよく出るものは挿穂當年より數寸の生  
長をなし三年目より稍頭抽出枝條繁茂すれ  
ども根部指大に達する間は其成長甚遅緩  
なり總てアテは其始め枝條を充分に繁茂し  
根株を大にし伸長の準備をなす此の間は其  
の形矮小にして株をなし梢頭の何れなるを  
辨し難き以上の準備なりて後は其の伸長  
成長頗る迅速なる此の準備年限は大抵上  
等地位は三年下等は六七年を要するなり  
能州に於ては右の方法を以て舊來は總て林  
地に直接挿穂したるも如斯する時は手入の  
年數長きに亘り經費を多く要するを以て近  
來はアテ又はスギ林の間に豫め挿穂し置き  
其稍々長するに及んで之を林地に移植する  
にあり又一步を進めたるものは畑地に苗圃  
を作りて之に挿穂し二三年にして梢頭の抽  
出する頃は是を林地に移植するにあり此の方  
に依る時は其の穂は初めより大なるものを  
要せず且林地に移植せられたる挿穂はよく  
一齊なるを得るを以て單純林の造林は此の  
法を行ふを可とす以上山林に直接挿穂する  
と苗圃に挿穂するに關せずアテの挿穂は  
通例其の九割以上の活着るものを存す  
ロ、取り木法  
梢頭伸びず株を存して下枝盛に發達する母  
樹ある時は其下枝を抑へて地に付け二股の  
小杉にて之を止め少しく土を掛け置くと時  
一年にして其他に附着する部分に多くの根

を生ずる故に其枝元を切りて獨立せし一本  
の苗をなす此の法は苗を作る上に於て最安  
全なれども多數の苗を作る事は困難なり

三、更新

能州にては舊來アテ林下に挿穂を行ひ異齡  
の混淆林を造成し老木を擇伐すれば次回の  
挿穂に係るもの次代の主木となり斯くの如  
くして永久に維持せらるゝもの多し勿論直  
接林地に挿穂したるものは其成長不整なる  
を以て殊更數回に挿穂せざるも直徑級に非  
常なる差あるを以て尙ほ異齡混淆の觀を呈  
するあり又スギと混植せられ或はスギ成林  
後其下木として挿穂し二樹の混淆又二段林  
の形を取るあり斯くの如きものはスギ伐採  
後アテは次代の主木となり永久アテの擇伐  
林となるか又皆伐後再びスギ或はアテを新  
植するなり近來は特に皆伐後單純林を作る  
もの増加せるが如しアテの如き殊に然  
り雜木林をアテ林に改むる時は伐期二三年  
前に其雜木林を簡單に下刈りし又は全く下  
刈を行はしめて其林下にアテの挿穂又は植  
付をなす然る時はアテ稍々生長して梢頭抽  
出するに恰も其の雜木林の伐採せらるゝ  
時季なるを以て完全なるアテの新林を作り  
得るなりアテの挿穂及植栽距離は可成密に  
するを要す上等林地に於ては一步二三本下  
等に於ては四五本に及ぶべし但し高價なる  
苗木を斯く多數密植するは不經濟なるを以  
て之又挿穂法の行はるゝ一原因となるなり  
アテを疏植する時は下草刈拂の年限永くし

て經費多く且つ成長遲緩なるを以て樹冠の  
鬱閉する間林地を永く乾燥するの不利益あ  
るなり

四、手入及保護

下刈は直接挿穂のものは五年乃至十年間  
之を行ふ苗木植栽のものは三四年乃至七八  
年にて足れり  
皆伐林に於ける補植は注意して之を行ふへ  
し殊に直接挿穂の山地に於ては枯死せざる  
も成長せざるものあるに依り此の如きもの  
は別に仕立てたる良苗を植栽して生長の齊  
一なるを務めざるべからず雪に倒れたるも  
のは翌春必ず之を扶け起し繩又は棒を以て  
之を支持すべし枝打は十年頃より之を行ふ  
枯枝はよく之を取り除き枝元の幹に附着せ  
ざる様殊に注意を要すアテの枝はスギの如  
く自然に枯落することなきを以て幹に接し  
丁字に之を取り去る時は伐採後板に挽きて  
損失を招くべし生枝を過度に取り除く時は  
大に生長を損ず殊に下等の地位に於ては容  
易に鬱閉を恢復すること能はざるべし枝葉  
の附着する部分の長さは常に全幹長の二分  
の一より小なるべからず除伐及間伐を徐々  
に之を行ふべし

五、造林費

林下又は畑地に於て養成したる苗木は頗る  
高價なれ共挿穂は低價にて之を求め得べし  
又直接林地に挿穂するときは一日七八百本  
は容易に是を得し得べし然れども下刈年限永  
きが故に割合に多くの費用を要す

第五 現在及將來の作業法

能州に於ては舊來總て粗糲なる異齡混淆林  
又は不規則なるスギとの混淆林を作り擇伐  
を主とせしが近來は皆伐を目的とせる單純  
林頗る増加せり今將來の見込みに付少しく  
記する處あるべし(未完)

學校記事

◎安藤校長出張 安藤校長は五月十七日長  
野市に於て開催の全國産業組合大會に出席  
十九日歸校  
◎平田子爵來校 長野に於ける前記産業組  
合大會に列席の歸途五月十九日夕來福せら  
れたる前内相平田子爵には翌廿日午前九時  
臨校、校長室に少憩せられ學校一般の施設  
に就き校長より聴取せられ校長の懇請によ  
り九時半より卅分間職員生徒の爲有益なる  
訓話を試みられたり了て校内標本室等一覽の上  
十時半歸還せられたるが歸らるゝに臨み校  
長の懇請を容れて記念の爲校長室前に樅樹  
一本を手栽せられたり當日は生憎二年三年  
の旅行中に屬し職員も少く學校を擧つて子  
爵の聲咳に接するを得ざりしは遺憾なれど  
も子爵の全身に溢れたる至誠と豐饒壯者を  
凌ぐが如き精力とを直觀せしものは多大の  
感動を惹起し國家の爲淬礪倦むことなき子  
爵を愈々欽仰するなるべし訓話は速記しあ  
れは何れ機を見て發表せむ  
◎山火事 五月廿四日午後零時半學校の北

東千村定吉氏所有の松山に火災突發せし爲  
安藤校長を始めとし大場教諭代田林業夫及  
一年生全部は消防の爲即時出動險阻を冒し  
て消火に盡力し三時頃漸く鎮火したるを以  
て一同歸校せるが原因は入夫の煙草の火よ  
り出でしものなりと云ふ校長は一同の歸着  
を俟て森林防火に對する注意を與へ併せて  
本日之勞を謝し了て解散を命せり因に當日  
見舞として來校せるは高野巡查、宮田、矢嶋  
兩工事監督、青澤四郎、青澤清の諸氏にして  
答禮の爲來校せるは下村新開村長、千村定  
吉、沼田峯雄諸氏なり

◎修學旅行隊歸校 北村川崎二先生の率ゐ  
る關西方面旅行隊(二年生)は五月廿五日午  
后八時、七宮、嶋内二先生指導の關東方面  
旅行隊(三年生)は五月廿七日午后六時何れ  
も元氣旺盛にて無事歸校せり  
◎武術稽古始 前號所報の通り武術教師は  
己に任命済となりたれど實習及び引續きて  
修學旅行の爲稽古開始の機を得ざりしが五  
月三十日愈々稽古を開始せり全日は放課後  
より職員生徒一同講堂に集合、校長の訓示  
に續いて松原教師の武術に關する諸注意あ  
り夫より生徒各箇に就て稽古をなし午后五  
時終了せり因に各學年毎週の稽古日は左の  
如し

第三學年及第一學年孝組 月曜第六時ヨリ  
第二學年及第一學年忠組 金曜第六時ヨリ

第二回校友會記事

「梳る往來の雲や山茂る」頃は六月二日天朗  
に氣澄み自活と自由の氣満ち満ちたる本  
校雨天体操場に於て本年度第二回の校友會  
を開き二三年の修學旅行視察談をきく辯士  
は次の順序にて續々登場せり  
◎長崎君 悠々大軀を壇上に運び聽衆を笑  
はしたり感動さしたりするところさすがは  
老練老練氏が講演の主点は氏が旅行中に於  
ける種々の印象についてであつた即ち高野  
登山下山の苦難伊勢神宮の壯麗吉野森林の  
美吉野大瀧土倉氏の一本一万二千圓と云へ  
る槍の話及京都三十三間堂の佛の數多きに  
驚嘆せる事高野にて危機一髪を免れ漸く汽  
車に乗り得し痛快事等で簡潔要を得たもの  
であつた

◎長谷川君 東京目黒林業試驗場視察につ  
きての天畧を説明せられたり幽玄なる眼  
鏡の奥より時々笑の色を見せるところ可笑  
しかりき  
◎等々力君 吉野森林視察の所感であつて  
其の森林の美人を驚嘆せしむるのは氣候地  
味等の力は第二で無形の愛林思想が第一の  
要素なりと説かれたりしかし氏の態度に元  
氣を缺くは少しく憾むべしだ  
◎都竹君 論難の巧妙なるありストートル  
も三舎を避くべしさすか氏は當校切つての  
雄辯家だ開口一番旅はうきものつらきもの  
とた得意な口吻で聽衆を魅し昔の旅は箱根

八里天龍の難所になやみしが今は汽笛の聲  
數分のゆめと大正の旅を賛し次いで旅の所  
感について述べられた都を旅するは旅なら  
ず大なる自然に接し自然の與會人生の趣味  
地歴の回顧之が旅の本領なりと概括すれば  
氏の論はかゝる意味なき實に氏が自然を  
語るや一篇の詩を誦する感ありき  
◎今井君 旅行中目撃せられたる吉野林業  
の隆盛及都會の繁榮に付き之に伴つて來る  
農村及林業との關係に就ての事實であつて  
即ち都會は直接間接農村より資金を吸収し  
繁榮す而して農村は只農産物の賣却により  
てのみ資金を得るに農村の林業思想淺く立  
派な富源即ち林地を捨て、其の資金は盡く  
銀行其他の道を経て都會に運び去られ益々  
農村の衰頹を來たすのである吾等は林業の  
模範たる吉野を視ると共に其の重大なる責  
任あるを自覺せよ

◎市岡君 眼中炬を閃めかせその勇毅の態  
度と共に浩然の氣磅礴せる顔色は實に滿場  
水を打たしめたりしかも又時々聽衆を抱腹  
絶倒せしめて聽衆を飽かざらしむるところ  
はさすがなり氏の説くところは「市岡式旅  
行法の主張」なり之の發明は實に氏が旅行  
中の苦心によりて得たるものにして所謂氣  
海丹田に力を入れて歩行すれば毫も疲勞す  
ることなしと云ふにありき  
此外北村生先の都會集中の弊についての所  
感安藤校長の旅行談批評旅行中學校に於け  
る出來事其他に就いて演説あり午后五時終  
了せり

第一回庭球大會

六月一日午前八時半より本校庭に於て本年  
度第一回庭球大會開催せり當日は小學校職  
員十余名も参加し非常に活氣を帯び目覺し  
く其技を競へり勝負左の如し (○は勝)

- 恩田 (柳澤得) 柳澤止
- 北原 (柳澤義) 柳澤義
- 加藤 (千村) 千村
- 岡西 (柳澤義) 柳澤義
- 百瀬 (加茂) 加茂
- 澤田 (柘植) 柘植
- 矢嶋 (古畑) 古畑
- 平田 (小嶋) 小嶋
- 塚田 (種倉) 種倉
- 中垣 (喜多村) 喜多村
- 坂本 (今井武) 今井武
- 熊谷 (今井武) 今井武
- 肥田 (吉澤) 吉澤
- 大場先生 (家高先生) 家高先生
- 代田君 (末木先生) 末木先生
- 大森 (中嶋先生) 中嶋先生
- 丸山 (林先生) 林先生
- 中嶋先生 (校長先生) 校長先生
- 久保田先生 (川崎先生) 川崎先生
- 水野 (吉澤) 吉澤
- 二木 (今井安) 今井安
- 花村先生 (藤枝) 藤枝
- 田上先生 (原) 原
- 宮澤 (吉川) 吉川

雜誌費領收報告

- 一金壹圓宛 園原咲也君 青澤庸三君
- 一金五拾錢宛 新田忠次郎君 塩澤英一君
- 一之瀬製襪壽君
- 小松先生へ寄贈金領收報告(第三回)
- 一金五拾錢宛 渡邊知則君 青澤庸三君
- 征矢野餘所夫君 小林秀一君 久保田
- 吾良君 宮入汎省君 新田忠次郎君
- 赤岩藤太郎君 鹽澤英一君 多田慶次
- 郎君 上田 二君 吉澤英雄君 佐藤
- 一郎君 宮澤嘉一君 一之瀬製襪壽君
- 一金六拾錢宛 森殿君 米山修君
- 一金壹圓宛 松本清太君 高柴真次郎君
- 中島要人君
- 小計拾 七拾錢
- 累計拾六圓拾錢
- 高木先生へ寄贈金領收報告(第一回)
- 一金五拾錢宛 征矢野餘所夫君 久保田吾
- 良君 上田 二君 一之瀬製襪壽君
- 新田忠次郎君 高柴真次郎君 中嶋要
- 人君
- 一金四拾錢宛 森殿君 米山修君
- 一金壹圓 松本清太君
- 小計五圓三十錢
- 江畑前校長へ寄贈(追加)報告
- 一金壹圓 松澤莊太郎君
- 累計壹百七圓也
- 新築落成式寄附金報告(第一回)
- 一金參圓也 野知里 慶助殿
- 同 高橋 博殿

- 同 原田 義治殿
- 同 中村 豊治殿
- 同 坂本 忠治殿
- 同 兒野 榮殿
- 同 杉本 貢殿
- 同 西野 入徳殿
- 同 岡田 恒治殿
- 同 金井 澄水殿
- 同 上條 嘉一郎殿
- 同 瀬原 昇殿
- 同 三原 實殿
- 同 青澤 庸三殿
- 同 吉澤 英雄殿
- 同 大久保 五成殿
- 同 關谷 静夫殿
- 同 上田 錡二殿
- 同 内田 益治殿
- 同 野中 高就殿
- 同 徳武 國久殿
- 同 小谷 益實殿
- 同 藤田 要吾殿
- 同 高橋 作次殿
- 同 内藤 善助殿
- 同 松田 力熊殿
- 同 喜多村 明殿
- 同 松嶋 周一殿
- 同 代田 元之助殿
- 同 小計七拾四圓五拾錢也

第三學年修學旅行日誌

五月十四日 水曜日 晴天 (自福島至桐生)

林業視察の目的を持って旅行出發の日である... 五月十五日 木曜日 曇天

播種床替等實に整然たるには感嘆せざるを得なんだ、時間切迫の爲め駈足にてステーションに至り...

煉なり (一) 採鑛、坑内の無數の横穴にて坑夫が鐵槌又は火薬を用ひて岩石を破碎して採取せし...

を水と共に箱に入れて淘汰するのである... 九、泥鑛淘汰盤。最終の選鑛器とも稱す可きものにして...

ご焦熱地獄も斯くやと思はるゝ計りで器械運轉の響と相和し名狀する事が出来ぬ位である...

主任となられ工事は多く運東葉、芝士を用ひ經費は一坪(一樹)十三錢五厘又谷間に點生せる笹を繁殖せしむる爲め...

一、燒鑛所。硫黄分を分離する所である... 三、煉銅所。前者のものを精銅とする所である

本山一千三百三十坪... 通銅一千八百七十九坪... 小瀧一千〇九坪

昨夜幾度か夜具の襟を掻き合せしも理りなる哉今朝起き出れば男体山は言はずも哉...

一里半余を下り「岩の鼻」よりは電車に投ず  
此地に精銅所及發電所あり乗車約一里にし  
て日光町に達す直に東照宮參拜に向ふ石鳥  
居を入りて五重塔、御假殿、巨石、燈籠、  
表番所、表門、三神庫、齋淨、御神厩、金  
松樹、飛越獅子等を見物した陽明門は今修  
繕中の事とて十分賞する事が出来なかつた  
のは残念だ、御本殿、奥院、二荒神社、大  
猷廟に參拜折柄今朝よりの雨は益々威を逞  
うし來りし故急行にて大谷川に架ける神  
橋を眺め日光町神山旅舎に投宿す  
當町の東南に有る杉並木は實に有名なるも  
のにして今その概要を述べんに延長十四里  
宇都宮迄續き本數六万本樹齡二百七十年樹  
高十五間乃至十六間一本の價格數百圓内外  
總體百萬圓内外之の並木の沿革は三代家光  
公が家康の廟を造る爲諸大名をして多くの  
金品を出さしめしに川越藩主松平左衛門大  
輔源正綱は杉を植て之に代へしもの即此  
の並木にして實に美觀を極め世界第一の稱  
がある(未完)

第二學年修學旅行日誌

六月十四日 水曜 晴

(自福嶋至二見浦)

夜は未だ明けやらす時を立てる雀は聲勇ま  
しく吾行を送るの感あり午前五時木曾福島  
驛に集合す驛前にて北村先生より旅行中に  
關する注意あり同五時五十分發上り列車に  
投ず車窓より御岳駒ヶ嶽の靈峯木曾川の河

流を眺めつゝ髮覺の碧潭、小野の翠簾とも  
後にして須原を過ぎ遙に阿寺御料林の一端  
を望む三留野に城山公園大平峠を遠望しつ  
木曾代表的美林の賤母御料林を見る針葉  
樹、潤葉樹混交して鬱蒼たる老樹は天を摩  
する許なり、坂下驛は長野岐阜兩縣の境に  
して火災の跡今尙慘憺たり此處より遙かに  
惠那山を望見すべく數多の隧道を経て中津  
川に達す此處には中央製糸場あり附近に竹  
林の見るべきものあり此地以南常緑潤葉  
樹の點生するによりて其の暖帯の域に入り  
たるを知る土岐津多治見共に製陶業盛んに  
して其の影響たるや四圍の連山は皆な禿頭  
病に罹り森林荒廢の極に達せりと認む高藏  
寺には多くの泥炭の堆積せるあり此處より  
は四望濶然茫漠たる平原にして目を遮るも  
のになし勝川驛より名古屋の天守閣の金  
鯨の日光に輝けるを見て壯快禁せず既にし  
て午前十一時名古屋に到着す此處にて列車  
を待つこと十有餘分午前十一時十八分發龜  
山行列車に投ず此の附近は濃尾平原の中心  
にして漢々たる麥と菜種の大圃場たり已に  
して木曾川鐵橋榎川鐵橋を過ぎ桑名驛に  
達す此の地は舟車の便ありて貨物の堆積す  
ること夥だし當田に至れば渺々たる伊勢内  
海を望み車窓遠く黒松の海岸に帶狀をなせ  
る防潮林を展望す河原田附近には多くの樫  
椎等ありて暖帯林に屬するを標示せり龜山  
驛にて參宮線に乗り替へ二見に向ふ「伊勢  
は津でもつ」と俗歌に唄はるゝが如く伊勢

の大都會にして縣廳あり郊外に赤煉瓦塀な  
る監獄あり赤衣を纏へる囚人の作業せるも  
一入目立ちたり本居翁の生地たる松坂驛其  
他數多の驛も過ぎて程なく宇治山田に着す  
流石に大廟參拜者の昇降するもの多く驛は  
宛も人の波をたゞよはし難踏甚だし此處も  
素通りにて愈々待ちたる二見の浦に着す時  
に午後三時四十五分旅舎二見館に向ふ旅舎  
は海濱白砂青松の間にあり風景絶佳なり此  
處にて旅装を解き各自隨意に散步遊覽に出  
かく、午後八時頃一同歸館し夕食を喫し北  
村先生より今後取るべき旅行の行程其他二  
三の注意あり尙防潮防風杯につき御説明あ  
り就床午後九時  
五月十五日 木曜 晴  
(自二見浦至奈良市)  
牀前に打ち寄る波濤の響を聞ける戸の軋  
れる音に夢を破られ午前四時半起床す直ち  
に岩が鼻に至り日出を見むとす折悪しくも  
淡き浮雲の爲めに之を見る能はず静に満ち  
来る朝潮の深紫なると花と亂るゝ白波の美  
しき白帆の點々たる秀麗なる風光に見惚れ  
しのみ六時十分二見館を出發して停車場に  
て列車を待つ事四十分再び車上の人となり  
て山田に向ふ時既に七時十三分列車は鏡の  
如き田圃中を疾走し途中防風林なる黒松の  
森林を窓に眺めなごし驛に山田に着す七時  
半停車場前より内宮行の電車に乗り同九時  
内宮前に着す宇治橋を渡り五十鈴川に手洗  
び口漱ぎ古杉古松技を交へて森々たる境内

に入ればたい神々しさを覺ゆるのみ、崇嚴  
畏敬の念に満ちて參拜を終る境内には日露  
戰役の紀念品多く當時苦戰の程坐に忍ばる  
九時十六分宇治發電車にて山田に向ふ途  
中農業館徴古館を參館す農業館には木曾谷  
の模形其他磨丸太木材の標本等數多ありて  
吾等の眼を異様に輝かしめ徴古館には數多  
上古の遺物を蒐集陳列しあり時間の都合上  
充分視察するを得ず遺憾ながら此處を發し  
午前十時半外宮に參拜す神殿境内の規制内  
宮と異なる所なく崇嚴なること言はむ方なし  
一時三十四分發列車にて山田驛を出發す汽  
車は杉竹松等の混交林の中を縫ひて走る此  
地一帯の森林は第二期林相變化の状態にて  
樺松等の盛生せるを見る車窓より四方の風  
景を賞しつゝ龜山驛を過ぎて奈良市に向ふ  
汽車の兩窓より眺むれば山又山に連なる數  
百町歩の造林地あり林相整然として甚美な  
り此の附近は以前より造林事業盛にして最  
初は谷間の地味肥沃なる所のみ植林し來り  
しが近來林業の發展と共に次第に勃興して  
現今の如く全山悉く植林せらるゝ事となり  
しならむ殊に此の地方に於ける造林は杉檜  
の混生林多く皆吉野式に倣ひて植林し且つ  
管理の方法亦當を得たるが爲吾が木曾谷に  
もまさる美林も見認められぬ此等の造林地  
の大部分は有名なる伊勢諸戸氏の經營せる  
ものなりと聞く大河原附近には數町に渉る  
竹林を見懸て笠置驛に着す此の驛を距る數  
丁にして笠置山あり笠置温泉あり月ヶ瀬も

五月十六日 金曜 晴

(自奈良市至上市)

程遠からず汽車は一刻と進行し暮靄深き  
黃昏の頃奈良奈良の聲に喜色滿面戸を押し  
開き下車す時に午後六時四十分大佛殿の高  
き薨輝きて我等を迎ふるものゝ如し同七時  
十分對山樓に投宿す同夜奈良縣林業技師中  
尾氏の訪問を受け北村先生より御紹介あり  
夕食後俄かに雨模様となり市街を散歩する  
も困難を感じたり午後十時半就床流石は南  
都なり雨も優しく軒を打ちて止まず  
五月十六日 金曜 晴

午前五時起床、朝食後六時三十分對山樓出  
發す、大和は皇祖創國の地、奈良は七代帝  
都の跡實に生ける歴史は千二百年、七堂伽  
藍の偉觀尙存し、加ふるに天然の佳境應  
接に違あらず、先づ中尾氏の案内により東  
大寺の大佛に參詣次に有名なる奈良公園の  
公園林を視察す幸に中尾技師の御説明によ  
り公園林の梗概、若草山の由来等を詳細に  
聞き取り本多林學博士の設計に成る大運動  
場を見、附近に起伏せる神鹿も亦趣味多く  
春日神社境内の「ナギ」の純林の鬱蒼として  
暗きまでに茂れる様又異様に感づれより  
二月堂、手向山八幡、春日神社等に參拜、  
奈良縣物産陳列場へ赴き此の陳列場は亞米  
利加産「オレゴン・パイン」のみにて建造せら  
れたるものにて構造も亦美を盡せり全館を  
視察の上公園を過ぎり帝室博物館に至る、  
此所には美術部、歴史部、工藝部等に分れ  
今より一千有餘年前天平年間の遺物たる木

像及扁額其他古器物夥しく木材天然保存力  
の斯くも無限大なるには坐ろ感する所あり  
たり、時已に十一時此所を發し各自自由視  
察を許され諸方面に向へり午後三時停車場  
に集合全三時三十分の氣笛と共に奈良を  
發し途中窓より桃、梨の果樹園を眺め法隆  
寺を過ぐるに及び密柑の多く栽培せらるゝ  
を見る、王寺驛にて和歌山行に乗り替へ午  
後四時半發沿道標、赤松の人工造林を見る  
高田驛附近には桐の栽培多く壺坂驛には桐  
材堆積せり、吉野口驛にて吉野輕便鐵道に  
乗り替へ吉野に向ふ、二三言交はす間もな  
く早や氣車は吉野驛に着きぬ、此處には北  
村林學士の經營せる製材場あり昌明なる吉  
野川に沿ひて行くこと二十餘町折よく鮫島  
吉野郡勸業主任、岸田林業主任兩君の御出  
迎へを受け同夜は本郡大林業家たる林學士  
北村(清治)先生の吉野林業の起源、經過及  
植林、間伐法等に付き有益なる御講話あり  
終りて午後十一時就床せり  
(北村林學士の吉野林業談)  
先づ最初に木曾と吉野との林業を比較し  
其長短即ち木曾の林業は主に藩政により  
て成立し吉野林業は民間の自發的經營に  
よって成立し木曾に於ける主木は檜にし  
て皆天然林によるもの多く吉野林業の主  
木は杉にして皆人工造林によりて形成せ  
られたるものなり。而して吉野林業の特  
徴は植林及間伐法にして木曾は伐木運材  
を以て世に知らる今之を相互に比較して

彼我の運材法の相違及缺點を指摘し吉野林業に於ける密植々林及二、三級植等につき詳細なる批評的の説明あり、次に吉野林業が今日の如き盛況を呈するに至りしは立地の關係に據る所大なりと雖も借地林業の制を定め他地方の資本家を招致して盛んに造林せしと山役金の制度により民間に熱烈なる愛林思想を生ぜしめ之れを撫育すること親子の情に異ならず吉野地方は一帶に地味肥沃して且つ氣象上其他理學的性質良好にして之れに従事する人夫は技術に熟練するに由るなりと論じ吉野に於ける植林は一町歩につき約一万本程にして其後の生育状態に鑑み次第に間伐して林業の目的とする樹幹通直、長幹無節の良材を得るが爲めに斯くは密植するものにして之れがため年輪の整一なる所謂工藝的性質の良好なるものを造成すと云ふ、而して其の植付方法は種々ありと雖も主として三角植栽と正方形植栽とを行ふ、本多博士は土地利用上及森林保護上より三角植栽を奨励せらるゝも北村氏は理論上より言へば三角植栽に勝るものなきも實際に於て三角植栽は其實行困難にして其後の管理手入等にありて不便尠からず、故に今後植栽せんとする者は須らく従前通り正方形植栽を可とす、と論究し間伐方法にありても本多博士は優木を殘置して劣木をのみ代採するものゝ如くに論せらるゝも現今實地に於

て行はるゝ間伐法は之れと異なり劣木を主として伐採するも都合によりては優木をも間伐せざるべからざる場合ありと之れを實地經驗上より又學理上より證明せられ言々簡明適切にして吾等後進者をして大いに得る處あらしめたり(講話終)  
五月十七日 土曜 晴  
(自上市至大瀧)  
午前六時起床先づ眼に映づるは天地のあらゆる莊嚴と雄天と静寂とに充たされ翠色滴るばかりの吉野の林相と清冽昌明なる吉野川となり朝食後吉野郡林業技手岸田氏來宿大なる吉野郡地圖により吉野林業に關する一場の講演ありき其大要次の如し  
「吉野郡は奈良縣の南部を占め面積百三十三方里(奈良縣の六割七分)あり地積上本邦第一の大郡なり分ちて二町二十三ヶ村とす土地臺帳の示す處によれば總反別凡九万町歩(實積凡二十万七千町歩)の中森林地凡八万五千町歩(實積凡十九万町歩)あり即ち地積上郡の九七%は森林なり而して絶對的林地に富めり且つ近來植林熱の勃興とともに森林面積は益々増大しつゝあり、次に本郡の山岳としては郡の中央なる彌山(約六千尺)を最高とし大臺ヶ山、山上山之に次ぐこれらを盟主とせる脊梁山脈は郡内を縦横に相重疊し且つこれらの深山及山嶺には原生林を見ること多しといふ交通は前記の地勢なれば不便極まりなく輕便鐵道の郡北部にあるのみ他

に大なる交通機關なく十津川村の如きは米麥類の運搬困難なる爲常食としては稗、玉蜀黍の類を用ふといふ  
河流は吉野北山十津の三川ありと雖もこれらの水運による能はざる部落多き本郡の地勢なればかゝる地の交通機關としては目下設計せられつゝある鐵索運搬装置の如き最も適せり而して該線は大臺ヶ原山附近より約六里の地點に達するものにして此企劃にして成功の曉にはその延長にたいして蓋し本邦第一たるべしと而してこの運搬の便を籍らば郡内各地の深山に在る原生林を伐採しその縦擗して等の巨材も容易に市場に提供し得べしされば現今深山なるこれらの立木を搬出するも收支償はざる爲、あたは巨木を巻括してその跡地に杉扁柏を造林すといふ  
故に本郡の最大急務は交通運搬の便をはかるにあり  
吉野林業は分ちて一、吉野川流域林業 二、十津川流域林業 三、北山川流域林業の三とす普通吉野林業と稱せらるゝは第一項にして且最も進歩し最も集約なる林業を營む、又吉野林業者は各郷に於て材木業組合を組織せり其重なるものを擧ぐれば川上郷、小川郷、中莊郷、西泉郷、三郷、十津川郷、黒瀧郷、北山郷等なりこれらの中その施設經營の整へるは川上郷の組合にして即ち本日諸氏の視察せむとする大瀧地方に組織せるものなり

吉野の地質は秩父吉生層の岩石より成り石灰岩多くして最も杉の生育に適せり故に吉野林業の生林木は杉にして副木として扁柏を植栽す  
而して其植栽数は壹町歩に付四五万乃至二万本なり尙地質によりて  
一等地 杉五尺四方に一本  
二等地 杉四尺五寸四方に一本  
三等地 杉四分の三 扁柏四分の一 混淆  
四等地 杉二分の一 扁柏二分の一 混淆  
五等地 杉五分の二 扁柏五分の三 混淆  
以上の如く地質により純林或は混淆林を造林す  
次に吉野林業の特徴はらの施業上に於ては間伐にありと雖も林業大本の精髓は愛林の思想なり而して間伐撫育の懇切等あらゆる林木の發育を増進すべき種々の施業は皆此の愛林思想の發露に他ならず吉野郡十萬の住民は即ちこの森林に依りて生計を營むが故に林木を愛し林地を保護することは皆々の至情に出づる處にして兒女を慈む父母の情に異ならざるも宜なり間伐は苗木植栽後十年頃にの三割内外を間伐し以後成長の状況により五年乃至十年目位にの三割内外を間伐すかくの如くして二三回の間伐を終いなば造林費保護手入費等の大部分を償却し得といふ、吉野杉の用途として大材は攝津灘地方の酒樽用材となす故に年輪の整正木理の鮮明纖維の通直木香及色澤の良好

なるを要すこれらの特徴は皆間伐に基づき来るを以てこの法には最も熟練と經驗とを要す、杉の枝打は植栽後七八年に行ふ外以後は自然の枯落に委す  
扁柏の枝打は土地により異なるも普通十、二十三年生より行ふ  
右の講演を聴取終りて各自いよゝ前途山路二ヶ月の事とて脚絆草鞋の輕裝となり靴及荷物の一部は一括して吉野驛前北村製林所宛に送り午前九時宿舎を出發して吉野川を渡り右の左岸に沿うて進むこと暫時にして飯具に着し吉野郡立實業學校を參觀す建物の結構は我々の舊校舍に似たり同校職員案内により玄關當りの生徒製作品陳列室より實習教室、工具室、寄宿舎等を視察す、實習室にありては數十名の生徒は或は鉋を持ち或は餘念もなく家具什器類の製作に従事しつゝありき器械室にては五馬力の蒸氣機關により運轉せらるゝ縦鋸にて木材を挽き割る實況を視察せりこゝにて約一時間を費し十時同校を辭す同時に昨夜來吾々一行を歓迎せられたる岸田氏に別る  
行くこと暫時にして道は次第に爪先上りとなり左方の吉野川には丸太材の筏流し數行あり追々足の疲勞につれ筏上の人呑氣にも辨當使ひつゝ流に委せつゝあるなどうゝる吾等に恙望の念を惹起せしむ  
運材の状況木會のうれと著しく異なるは水量の多少と流れの緩急とによるものなるは昨夜の北村林學士の説により今之を實見す

るを得たり  
日は漸く高く乾きたる坂路より反射するは白く一行をして先づ上衣を脱がしめ又汗を招きぬ汗と喘ぎとこの二作用益々加はる竹林標林松林と段階を経て登り行けば吉野川は遠く左に光り吾らは右の山路にありやがて森蔭に吉野川を見失ふ川に別れて暫しが御社峠の中腹よりは愈々川上村に入りし故にや杉の純林扁柏との混交林あり全山皆これ深黒なる杉の鬱々者々として一點の隙もなき美林眼前に屹立し來る顧みれば新緑の雜木林來し方の麓にあつて點在し而も午後の烈日に照らされて色彩の或は濃翠なる或は黃褐なる一幅の水彩畫の如し更に視線を轉じ川上村の方向を見れば色彩單調なりと雖も豪壯雄健なる日本畫の黒繪の如し一行これに力を得勇を鼓して進む路傍五六年生の杉の一々繩にて支へられ風雪の害を防ぐの手入は森林愛護の程うかひ得て懐かしき心地す  
上下百町に近き御社峠で漸く越えて零時半大瀧村に達す先きに麓にて別れたる吉野川又こゝに會す、遠く川の上流を望めば重疊盡くる處を知らざる亂山の間より流れ來るなり、蕃山先生の歌我を欺かず實に吉野の流は美しき杉露の滴りて落ち來るものなり秀麗なる山のためすまの深碧の水潭桃源遠からざる心地す、流に沿へる坂口校舎にて一休晝食の後兼てよめ聞きし當地の林家家土倉庄三郎翁を訪ふ翁は本日上海の筈なり

しも吾等の故を以て慙々一日延期せられ我等一行を待たれし事とて直ちに翁家所有の林地に案内の勞を取らる翁は既に七十有餘歳の高齡なれども尙鑿鑿として壯者を凌ぐばかり體軀亦偉大にして五寸會員も一籌と輸する程なりき

翁の案内せられし林間に於て説明ありし處の要項次の如し

一杉の若木より採取せし種子より成育せる木は結實早く爲に生育を害す故に杉の種子は六十年生乃至百年生位の母樹より採種するを要すと路傍に存する實例を指して説明せらる

二間伐收入の例(二十五年生杉林)反別約六百貳拾四圓也殘存林木の價格材木業者に賣却なさば貳千圓乃至貳千五百圓位にして此林の造林に要したる支出金拾六圓四拾錢也内譯苗木代五圓植付人夫一人に付五百本十人代三圓、十一年生以前(間伐迄)に粗税其他手入費七圓九拾錢雜費五拾錢但しこの林木の生育極めて良好なりと附説せらる

三間伐材の賣價 末口直徑三四寸のもの一本に付壹圓九拾錢位

四林地の價格 壹町步三百圓乃至五百圓この價格は法外なるものなり此地方の林業地たるが故に騰貴甚しきなり

五間伐の法 間伐を施す目的は通直圓筒の幹材を得又年輪の整正せる材を得るが爲めなり故に間伐には先づ劣木を伐採して優木の發育を増進すべし優木を伐採するは萬止むと得ざる場合なり

六土地の劣等なるものには坪八本位に密植し二十年位を伐期とし皆伐して丸太材を得る造林法最も得策なり

七林地の性質を究めずして植栽すべき樹種をあやまり且つ林木生育の狀況を深く究めずして猥りに間伐をなせし爲め數百萬圓の大損害を被りたる實例として、森林に於て杉の發育極めて良好なるも扁柏の發育不良なる標本を示され林地と樹種との關係は大なりと述べらる

八間伐材としては檜は杉に數等劣れり故に吉野は杉を主林木となすなり

九枝打を參百年間施さざりし標本として示されたる老檜ありき

一〇檜の枝打ち 扁柏の枝は杉の枝の如く枯れて直ちに落つるものにあらず翁の研究によれば三四百年間枯れたるまゝ樹幹にありしものありきと故に扁柏の枝打は必ず施さるべからず、此地方扁柏の枝打は第一回樹高三間位の時地上一間位枝打す而して第二回は二十五年生第三回は三十五年生第四回六十年生頃以後枝打を施さず

一杉の枝打は成るべく行はず林木の閉閉によりて自然に枯落せしむるを要す然らざれば材質を害する思あり

二木材價格騰貴の趨勢 翁が始めて斯業に従事せられし弘化三年頃(於ける木材の價格に比し現代にては約貳百倍迄に騰貴せり)

三川上郷林業沿革畧 此地方は數百年の昔未開の時代に於ては樅梅類の天生せし處なりしが其後人類こゝに住居し人口増加と共にこの原生林を燒棄し其の跡地に耕作をなして日常の野菜の類を收穫しつゝありき然るに一二の住民が僅かに粗放なる造林法によりうの跡地に杉扁柏の類を生育せしめ伐出してこれを吉野川の流によりて運搬し下流の平原地方に出し、

が會々好況なりしにより住民のこれをなすもの逐次増加したりこれ川上郷の林業の濫觸にして其後の經營遂に今日の盛大

をなせり、而して林業の年伐を尋ぬるに三百年以前には未だこれあらざりし如しその證として徳川氏一統の際當地地方檢地役本多平八郎の檢地帳にはこの郷の事を記して「小松少々」云々とありと引照せらるれば往時本郷の貧窮なりし事察し得べし

往時は住民粟稗等を常食となせしが追々林業の恩恵によりて今や上等なる米穀の年々輸入せらるゝもの莫大なり

以上にて林間の説明を終りて歸途につく枝葉交りて鬱々なる密林を數多過ぎ間伐の剝皮せられて林間に乾かされつゝあるもの及丸太材の運搬等を觀察しつゝ下山す

本日の後半日を森林視察に費して阪口旅舎に歸着せしは夕陽西山に没し大瀧の家々よりは夕餉の煙白蛇の如く立昇る黄昏なりき

一行はこゝに土倉翁の老軀を以て常に余等の先登に立たれ且懇切に説明せられし厚意を謝して後旅宿の入浴に一日の疲勞を忘れぬ

同夜再び精力旺盛なる土倉翁は慙々來宿せられしが幼時よりの林業經營上の種々の經驗談を熱心に語らる全員翁が精力主義なるに驚く、九時翁の歸宅せられし後就眠

窓外を眺むれば晝間活躍せる如く見ゆし森林は靜かなる眼を結ぶべく天心にかゝれる月と晃めく星とは森の夢を守る如し月光隈なく照りて夜色蒼然たり更に淙々たる溪聲を聞けば晝間何の節なきも今宵は仙妃が奏する秘曲の如く月ますます高く夜夜彌々更けぬ(未完)

けぬ(未完)